三瀬川索道

曳索を引き上げる原動機を起動させて、しばらくすると、霧の中から赤茶色の搬器が姿を現わす。二つあるうち『下』と書いたテープを貼ったほうのブザを軽く突いてから原動機のレバを注意深く下げている。搬器があと少しで乗降場に達するという辺りで下げきる。運行要領三十頁『原動機操作要領』によれば、『四方津夜風』のサビの部分の早さで」とあるがそんな歌は知らないし、もはや聴かれることもないであろう。ともかくもギアは切れ、制動装置が作動する。運転室の引き戸を開けて乗降場に降りる頃にはブレーキドラムが効いて、搬器は丁度いい位置で停止している。どうやら前任者のリズムは会得したようだ。搬器の扉の掛け金を指で弾いて外すと、素早く、しかし搬器が揺れないように扉を開け放ち、運行要領『一連業務』の項九十八頁『乗降補助』にある通り、片足の爪先で押さえる。

乗客と目を合わせないように下を向いたままでも、彼等の服装や匂いや時たま聞こえることのある声や言葉の抑揚や何かから、その出自や職業や何かを想像することが出来る。いつしかそうすることが習慣となっていた。しかしここ数日の乗客ときたら、誰もが白か灰緑色の作務衣のような装束に身を包み、線香臭く、一言も口を利かず、ただ、しやらしやらと耳障りな音のする金の環が六つ付いた木の杖を鳴らし、ているばかりである。

搬器から乗客が全て降りると、再び運転室へ駆け上がる。トランジスタラジオのニュース放送が歌謡番組に変わっていた。ピコポコと電子音がリズムを刻む。彼等は大抵、運転室の下を潜る半地下通路を通じて隣の乗降場へ向かう。ここで降りる者は切符受け箱に切符を入れて勝手に出て行くから構わない。運行要領では、ここで切符回収という作業があった筈だが、状況が変わったということか。最近ここで降りる者など、いない。切符回収作業の頁はどこであったか、と思いつつ、上半身でリズムをとりながら運転室のもう一つの引き戸を通って上への搬器に先回りする。例の要領で扉を押さえて彼等が全員乗り終えると、掛け金を指で弾いて掛けて、運転室へ戻る。国民的歌手が炭鉱労

働者の悲哀を切々と唄い上げるサビの部分に鼻歌で合わせながら、今度は『上』のブザを鳴らす。上からの応答を確認して上への乗降場側の窓に移る。

曳索が引き上げられて搬器が上昇を始める。運行要領百七十二頁『安全管理』の項には「暫くの間、平衡索調整装置のレバから手を離してはならない」とある。平衡索調整装置は、搬器を下から支えて曳索の張りを保つ平衡索の張りを調整をする装置であるが、運転の度にレバで操作するものでもない筈だ。大体、この運行要領は操作員を見下しているようだ。前任者もこの記述通りに作業していたのだろうか。まあ、安全に越した事はないと思いつつもレバに手は掛けない。

彼等は何処へ行こうというのか、目的は何か、などと考える間もなく運転室中央の柱の赤ランプが点灯してブザが響く。上からの乗客がないから、ここ数日は空の搬器を降ろすという余計な作業がいつものリズムを狂わせていた。『下』のブザで応えて、ラジオから流れる間奏のピコポコと電気ギター独奏に合わせて机を指で叩きながら、まだ空回りしている原動機のギアを入れる。空の搬器は心細げに左右に揺れながら霧の中に姿を消す。今の搬器が下に到着して、乗客を乗せて、再びここに戻ってくるまでには暫く時間がある筈だから、切符回収作業がどこに書かれていたか探すことにした。

切符回収作業については、六百頁め以降の追補に書かれるべきである。逆に、空搬器の下への回送作業はもつと前の、例えば七十五頁『一連業務』の項あたりに書かれていて然るべきなのだろうが、『追補一』なのである。この追補からして、本編の倍以上の分量があり、最近では当り前となった諸作業が他にもあちこちに点在している。

こうして日々の作業をひとつひとつ運行要領のうえで再確認しているのには訳がある。上のほうの駅で欠員が出たというのだ。数日前の早朝に三瀬川索道事務所から直々の文書筒が送られてきた。滅多に使われることのない連絡用の気送管であるが、朝夕二回の受け口の点検は運行要領『一連業務』の項八十二頁『事務雑務』で義務づけられている。欠員の理由については当然のように書かれていなかったが、そんなことはどうでもよかった。文書は欠員の連絡ではなく欠員補充試

問の通知だった。受験希望者は夕刻の点検時間迄にその旨を事務所に返信しなくてはならない。つまり日々の点検を怠けている者は、この時点で受験資格を失うという仕組みである。受験資格は得られた。あとは数日後の試問の結果次第である。試問の得点がよければそれだけ上の駅に就ける。上に行けば行くほど色々な点で有利だし待遇だっていい。勿論、下の駅の者たちも受験するわけだから追い越されることだつて充分にあり得る。試問では運行要領の内容についての質疑が行われる。当然全てを暗記していなくてはならないのだ。

そういうわけで取り敢えず、運行要領はこの仕事をする者にとって絶対のものである。しかし実際には運行要領の通りに作業を連続することなどとても不可能である。事実、通知のあつた日も前夜から上下共にフル回転で一睡もしていなかったのだ。運行要領巻頭付録『運行ダイヤ』などもはや何の役にも立たない。この傾向はここ数週間ますますひどくなっている。事務所に報告する必要があると思つていたが今回の試問でそれが叶うだろうか。向上心とか勤労意欲とかそういう面での評価だつてあるかも知れない。

下乗降場と上乘降場とを繋ぐ半地下通路の途中、ちょうど運転室の真下に位置する場所は、その昔何か売店のようなものがあつたらしい小部屋になつてゐる。錆びついて開いたまま動かなくなつてゐる引き戸の中には、木枠に糸の垂れた凧のようなものが埃の塊となつてぶら下がつてゐる。何やら見慣れぬ異国の文字が踊る網の袋に包まれた何かのキャラクター人形らしきものが隅に積まれたままになつてゐる。その小部屋の中央は奇麗に片付けられて、黒光りする石を削つて作つた石像が置かれてゐる。運行要領巻頭『三瀬川索道略史』によれば、何が原因なのかは不明であるが、他に交通手段がなくなつた山の住人たちが廃線となりかけた索道を整備したのが現在の三瀬川索道の始まりだという。三瀬川溪谷はその名の通り三つの瀬のある激流を抱えた切り立った溪谷であり、索道が最も有効な交通手段なのだそうだ。で、その時の中心人物である「多多爺」の姿を象つたのがこの像であるということなのである。その石像は、ただの肖像というにはそぐわない畏怖の感情を湛えていて、むしろ信仰対象となりうる大きさがあつた。

そのためか、乗降客はその前を通る度に何かしら供物を置いていくという習慣が生まれていた。この駅に来る前の小さな駅でも、それより前の駅でも、すべての駅でその習慣はあるようであった。運行要領二百五十二頁『日常生活』の項には次のようにある。

「……或る意味で利用者の感謝と崇拜の的とも成り得る存在で有るから、其の供物を戴く事も又、仕事で有ると思つて良い」

石像部屋へは運転室から階段によつて降りることが出来、乗降客に見つからぬように供物を回収出来るようになっていた。日々の食事は供物によつて賄われているのである。しかし、巡礼者のような装束の乗客が目につき始めてから、供物の量は目に見えて減つてきた。

以前より、供物を回収する時には何か後ろめたいような奇妙な気持ちになつたものだが、こうして日々の回収が三日毎になり一週間毎になりすると、前にも増して情けないような気持ちになる。供物の少ないときには、送電線の変圧器のところに棲むクロハタマゴムシを捕獲して、運行要領二百六十八頁にある通りに茹でて食べる。桃色の中に緑の粒の浮かぶ体液のソースに浸つた紫色の卵状の内臓は実にうまいのだが、ムシを食べる習慣がないと思われる下からの乗客、特に子供たちなどは、乗降場にたまたま落ちたクロハタマゴムシを見ただけで悲鳴を上げること度々あり、そうした時に感じたのと同じ、恥にも似た気持ちになるのである。

切符回収作業の書かれた箇所は依然として見つからない。トランジスタラジオから聞き慣れた前奏が流れてくる。ピコポポポ、ピコポポコポと鳴るリズムボックスに被つて時代ものの電子オルガンが主旋律を朗々と奏でる。このビブラートが堪らない。可愛らしい少女が小鳥のような声で唄いだす。信じられない程の高音まで昇つて、軽く一回転のコブシを回して緩やかに下降する。電子楽器の単調なリズムが、却つてその上昇と下降を際立たせる。

と、夢のような空気を裂くように、ブザが響いた。慌てて応答してレバをさつきとは逆に入れる。空転していた原動機が唸り声を上げながら曳索を巻き上げる。やがて下からの乗客を乗せた搬器が霧の中に姿を現わす。

ジジジー、ジジジー、とブザが鳴っている。意識がはつきりしないまま応答する。ブザが黙ったところをみると、上下どちらの音が聞き分けていたと見える。頭はまだどちらの音だったのか、わかっていない。顔のあたりと腕と足が、まるで繋がった感覚がしないまま、本能的と言ってもいい動きでレバを入れる。目は計器を見ているが、計器のどこを見て何をどう判断するのか全然わからない。けれど目を離すわけにはいかないことはわかっていて、暫くそうしたまま体のどこかが次の行動を思い出すのを待った。ゆっくりと繋がっていない部分が繋がってきて、目が覚めた。目が覚めて初めて、今まで眠っていたことがわかった。

今も下の半地下通路をぞろぞろと乗客が歩いていく。もう何昼夜もこの光景が続いていたのだなあ、と意識する。彼等は相変わらず皆、白の巡礼風装束で統一されている。もはや灰緑色の者はいなかった。そうなのだ、と頭のどこかが了解したようでもあったが、何がそうなのか、それでどうしたのか、意識する暇は無かった。上の駅と連動したこの原動機が勝手に回って、平衡索を霧の中に垂らしながら搬器が乗降場に入ってくる。既に乗降場は白装束の乗客で溢れている。そのくせ、不思議なほど静まりかえっている。けれど何か圧迫する空気がある。掻き分けるようにして搬器を捕まえて扉の掛け金を指で弾いて外して開ける。搬器は当然のように空である。乗客たちは無言のまま整然と列を作って搬器に乗り込む。乗り切れなかった者たちは黙って次の搬器を待つ様子である。

運転室に掛け上がった『上』ブザを突く。待つ間もなく、焦燥感溢れる勢いで応答があり、同時に搬器はいつもより幾分早く霧の中を上っていく。上も忙しいのだ、と、ここ数年感じたこともない複雑な思いがよぎる。すぐにも『下』ブザが、と思う間もなく、ジジジー、ジジジー、と、これはさっきの音と一緒にだど気付き、聞き分けるも何もここ何昼夜か、聞くのは『下』押すのは『上』なのだど妙な納得をしつつ応答し、逆のレバで新たな乗客を待つ。

寝ても覚めても、とはまさにこのこと、などと思いつつ終わらない

作業を繰り返すうちに、連続する風景の中に、視界に引つ掛かるものがある。

場所は半地下通路の石像部屋。「多多爺」の前の供物が積まれる場所に、見慣れぬ物があるのだ。気になつて供物回収用の階段から石像部屋に降りてみた。今到着した乗客たちが「多多爺」の前をぞろぞろと歩いていく。その歩調にリズムがあるのがわかる。「多多爺」の前でほんの少しだけゆっくりした彼等の歩調は、それを補うようにさつきより少しだけ急いで進んでいく。そのテンポはラジオのピコポポポを想起させる。そつと「多多爺」の裏にまわると、小さな金属の音がする。脇の下から覗いてみると、ちょうど白装束がコインを積んでいるところだった。ああ、とまたしても頭のどこかが勝手に了解した。運行要領のどこかに載っていたろうか。しかしそれを確認する時間は差し当たつて今はなかった。運転室で催促の「上」ブザが鳴っているのが聞こえたから、慌てて乗降場へ走るしかなかったのだ。

霧が一段と深くなつた様子。運転室から見えた山の緑が、今はもう見えなくなり、ただ白の中へ上への二組の鋼索が、消えているばかり。ゆつくりと平衡索が下へ垂れ、いつしか搬器が白の中から姿を現わす。何日か振りの上からの便である。

既に乗降場から白装束の乗客たちは姿を消している。白の煙を引き連れて搬器が音もなく乗降場に滑り込んでくる。タイミングを合わせて扉に手を掛け、掛け金を指で弾き、外して開ける。乗客の姿はない。つ、と油引きした搬器の床に一条の筋。どす黒いその筋は紛れもなく、

「血だ」

声にするまでもなくそれは血で、バランスを崩して尻餅をつく。閉まりかけた扉を足先で蹴飛ばして再び開ける。奥の赤いビニルレザの座席はびっしょりと濡れて、ぼたぼたと床に落ちている血は扉まで届こうとしている。ぼたぼたと、ぼたぼたと、と滴るその様子は、ラジオのピコポポを想起させる。ラジオのピコポポ。そう、ラジオからはあの曲が流れている。

ラジオからはあの曲が流れている。上からの搬器は未だに来ないし、まさか座席が血で汚れている筈などあるわけがない。全ては夢だ。目が覚めた。目が覚めて初めて、今まで眠っていたことがわかった。またしても眠る間もない何昼夜かをまるで夢遊病者か生ける屍のように働き続けていたわけだ、いや、眠る間もないというわけではないな、横になる暇もないというのが正確だろう、と今度は割と明晰に判断する。乗降場から白装束の乗客たちの姿は消えている。既に峠は越えたか。と、下行きの乗降場に搬器が留まっているのが見えた。空の搬器は下へ降ろさなくてはならない。これが最後の便だったのか、それで眠ってしまったのか。原動機のレバに手をやって、ふと搬器の扉が開いたままなのに気付いた。

乗降場にも白いもやが流れ込んでいる。霧が深くなってきたようだ。搬器の扉に手を掛けて、床に流れるどす黒いものが目に入った。夢で一度見ていたからか、声を上げることもしない。奥の赤いビニルレザと血の色が一緒になっている。夢のように上からの乗客のものなのか、下からの最後の乗客のものなのか。一体何が起きているというのか。それよりも早急に搬器の清掃を行わなければならない。運行要領追補六十三頁『搬器点検要領追記』として「血液体液等による汚染の場合にも」との記述がある。要するにデッキブラシで洗い落とせということなのだが、あるいはこういったことが以前にもあったということなのか。

トランジスタラジオを乗降場に持ち込んで、あの曲のリズムに併せて軽快に清掃は終わった。運行要領には載っていないからだろうか、その血の主についての詮索は起らない。ラジオからは他にもあの炭鉱労働者の悲哀を唄ったものや、聞き慣れた曲ばかりが掛かっていた。思えばいつも同じ曲が掛かっていたようでもある。下への搬器の回送を済ませ、久し振りに乗客の居なくなつた乗降場を清掃する。運転室の整頓も終わるまで、何度かあの曲を耳にしたような気もする。全てを終えた頃、夕方の気送管受け口点検の時間となつた。受け口には試問に関する最終注意事項の入つた文書筒があつた。運行要領を所持の

上、予て通知の通り試問に挑むこと。尚、その他の備品は全て所定の位置に整頓のこと。トランジスタラジオは備品であるから、ここに置いていかななくてはならない。ひととき、あの曲や多くの聞き慣れた曲を聞けなくなる寂しさに襲われる。しかし運行要領同様、事務所の言うことは絶対である。さもなくば上の駅への昇級は望めない。ラジオからはまたしてもあの曲が流れている。ピコポポコポに併せて天使の様な声の少女がサビの部分を唄い上げる。

よもーつ、しらあさーかあ、よもーつ、しらあさーかあ、名も知らぬ少女歌手の唄うその曲こそが『四方津夜風』なのではないかとふと思う。その歌詞は地の言葉で聞き取れないと思っていたが、意味さえわかる気もする。

運転室の上側の窓際に外に向けてトランジスタラジオを置く。

『上』ブザで搬器の自動昇降を確認する。既に上の駅の者も準備を整えていたらしく、運行要領通りの応答が返ってくる。と、『下』ブザが自動昇降の確認を問う音で鳴った。いつものように応答しようとしたその時、かちかちかち、と下側の計器盤が反応して応答のブザが鳴った。まさに持ち出そうと脇に抱えていた運行要領を慌てて確認する。

『原動機操作要領』の項四十二頁に『隣接駅との自動昇降』として自動応答の件は書かれていた。この頁を開いたのは初めてかも知れない。紙がやけに白く見える。焦りが押し寄せるが既に自動昇降の秒読みは開始した。ラジオから聞き慣れた前奏が聞こえてきた。運転室の引き戸を開けて乗降場に降りる。ガラスに遮られて少しくぐもった音で、ピコポポコポ、ピコポポコポ、が聞こえる。乗降場の発車ベルが鳴る。今まで一度もこの音は聞いたことがなかった。搬器に飛び乗り、思い切り強く扉を閉める。勢いで掛け金が掛かる。バリバリと割れた電子オルガンの旋律に続いて可憐な少女の声が唄い出した。がくん、と揺れて搬器が引き上げられる。「多多爺」に積まれたコインの山を一瞬思いだした。あれは備品だろうか。後悔にも似た奇妙な思い。曲に送られるように搬器は霧の中に突っ込む。下側の窓から見下ろすと、これまで見たことのない角度で乗降場が屋根の下に隠れていく。駅と

『四方津夜風』が遠ざかっていく。

切符回収作業について確認がまだだったことが不意に気になった。膝の上に置いた運行要領を開いた。上まではまだ時間がある筈だ。